

博物館だより

第74号 2009. 9. 23

● 戸隠地質化石博物館が1歳になりました ●

昨年7月開館の戸隠地質化石博物館が1歳の誕生日を迎えました。小学校の思い出いっぱいの雰囲気の中、戸隠の化石から長野の大地の生い立ちを展示し、周辺の化石や自然を生かした体験型の活動が好評を得ています。開館後の総入館者は約1万3千名にのぼりました。これからも、市民とともに、自然を調べ・学び・楽しむための活動を行っていきたいと考えていますので、暖かく見守ってください。



軽石づくり

7月25日(土)、1歳の誕生日をみんなで祝おう!ということで「博物館 夏まつり」を開催しました。当日は無料開放とし、さまざまな体験を通じて自然の不思議を楽しく学びました。地質分野は、身近な材料を使った噴火実験や軽石づくり(カルメ焼き)、化石のクリーニング体験をしました。植物分野は草木染の実験、たたき染めのほか葉脈のしおり作りを行いました。動物分野は、通称「骨」部屋で動物の骨格パズルに挑戦です。工作コーナーでは、わらで縄をない、ぞうりを作ったり、自然の木を使った工作を行いました。また、当日から始まった夏の企画展「水辺のいきもの」では、ザリガニ釣りやカエルの餌やりを体験することができ、館内は1日中、子どもたちの楽しい歓声が響いていました。

この企画を支えてくれたのは、小学生から70歳を超えるベテランまで幅広い年齢層のボランティア約30名の皆さんです。駐車場の案内から各コーナーでの指導まで、さまざまな場面で協力をいただきました。化石や自然の豊かな「地の利」、そして、地域やここで学ぶ方々との「人の和」を生かし、みんなで楽しめる雰囲気を作っていきたいと思います。(田辺智隆)



たたき染め



水辺のいきもの



わら細工

戸隠地質化石館 企画展

夏の企画展「水辺のいきもの」 7月25日(土)～8月30日(日)

夏の期間、企画展「水辺のいきもの」を開催しました。市内に生息している希少な生き物から外来種まで約50種類を展示し、生き物と環境のつながりを「すみかパズル」をつかって楽しく学んでもらいました。一部の生き物は触ってもらって体の作りなどを勉強し、自然に親しむ方法として水辺の遊びや子どもたちに行った調査なども紹介しました。

生き物の展示は動きがあるため、子どもたちにとっても好評で、大人たちは懐かしんでいるようでした。特に子どもたちに人気があったのは、カエルやオオクチバスへのエサやり体験です。アズマヒキガエルが舌を伸ばしてあっという間にエサを食べる瞬間を興奮して見ている子どもたちの姿は印象的でした。また、オオクチバスが水槽に激しくぶつかりながら魚を食べる様子は「なるほど池に生き物がいなくなるわけだ」と納得したようで、教育効果も大きかったと思います。盛りだくさんで行った企画展ですが、いろいろな漁具、水辺の生き物のとり方や飼育方法など、まだまだ紹介しきれていないものもあり、「新・水辺のいきもの展」をいずれは開催したいと考えています。今回作成したパネルの一部や生き物は、引き続き3階常設の第5展示室や2階のワークルーム2などで見られます。企画展から常設展へと、少しずつですが成長していく博物館と生き物の様子をまた見ていただけたらと思います。(古賀和人)



秋の企画展「河原の石ころ」 9月19日(土)～11月29日(日)



誰もが一度は、河原の石ころを手にとって遊んだことがあると思います。そんな身近な石ころ、じっくり観察したことがあるという人は、意外と少ないのではないのでしょうか。よく見ると色や形、手触りもさまざまで、石ころにも個性があります。そして、その個性には石たちがたどった長い歴史が刻まれています。石ころは地層や岩石の"かけら"なので、大地の生い立ちを知る手がかりにもなるのです。今回は、さまざまなことを語ってくれる石ころの魅力を紹介したいと思います。

長野県には北アルプスや中央アルプスといった、標高3,000m級の山脈がそびえ、市内にも高妻山(標高2,352m)をはじめ、たくさんの山があります。そういった大きな山は、一体何からできているのでしょうか。登って調べればわかりますが、ちょっと大変です。そこで河原の石ころが登場します。川は山から流れ下りながら、低いところへ石ころを運んできます。ですから、河原で石ころを調べると、上流の山がどんな地層や岩石からできているのかを知ることができます。それを知ってもらおうと、県内各地の河原で石ころを集めてきました。その違いを確かめてみてください。そのほか、石ころの王様"ひすい"や石ころの見分け方も紹介します。石ころのおみやげコーナーも用意していますので、ぜひ見学に来てください。石ころを見る目が変わるかもしれませんよ!(竹下欣宏)

山田中地すべりと埋もれ木について



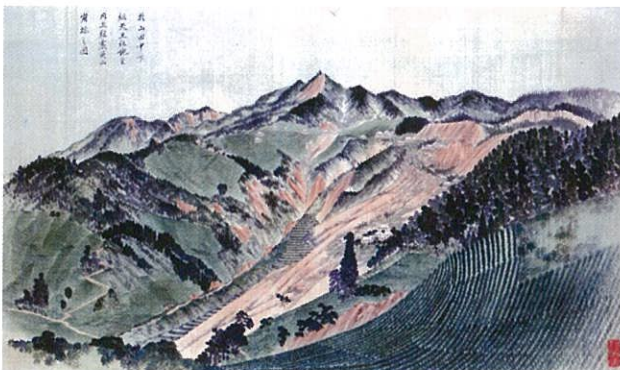
採取した埋もれ木

この2本の丸太は、今年7月に長野市小田切山田中の山中から掘り出してきた埋もれ木です。掘り出して運んでくる際に途中で切断したために長さが1mぐらいしかありませんが、土中にはまだ続きの部分が埋まっています。細いほうは直径18cmのスギ、太いほうは直径37cmのカラマツで、樹齢60年以上の大木です。弘化4年(1847)の善光寺地震のときに発生した地すべりによって埋没したものです。

■山田中の地すべり

善光寺地震の際、長野盆地西側の山間地では各地で地すべりや土砂崩れなどの土砂災害が発生しました。小田切山田中も大きな被害を受けたところのひとつです。古文書によると、地すべりが東繁、二ツ石、山田中の3村31軒全てを押し流し、住民168人中47人が亡くなりました(岡沢要著、弘化4年善光寺大地震記録集)。

この地すべりを記録した、詳細なスケッチが残っています。青木雪卿という松代藩の絵師が、地震から2年後に実施された藩主の被災地巡視に同行して作成した「感応公丁未震災後封内御巡視之図」(真田宝物館蔵)の1枚で、崩壊地の細部まで驚くほど正確に描かれています。この図から、山田中の地すべりの規模が幅約250m、長さ約900mだったことや周辺でも小規模な崩壊があちこちで発生していたことが読み取れます。また、崩壊地とその周辺に民家が描かれていますが、悲惨な震災から復興しつつある様子が伺えます。図の右中央やや下の集落は復興中の二ツ石で、その少し左下の斜面部分が今回の埋もれ木の採取地に相当します。



青木雪卿
「於山田中下組天王社地望同上組震災山崩跡之図」



左の図とほぼ同じ地点の現況。採取地は杉林の向こう側
(支所近くのガソリンスタンド前で撮影)

■埋もれ木の公開

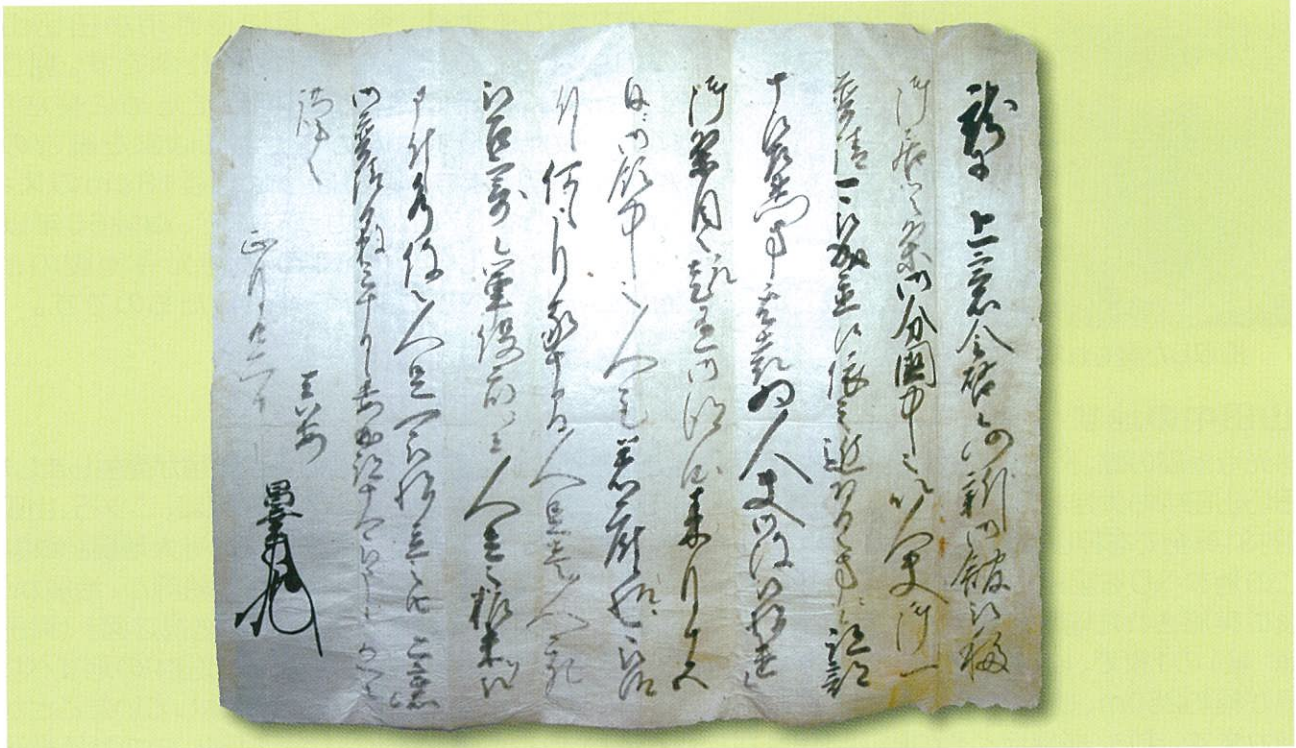
善光寺地震によって発生した地すべり・土砂災害は6万ヶ所以上といわれています。なぜこんなにたくさんの地すべりが発生したのでしょうか?それにはこの地域の地質が関係しています。

長野盆地西側の山地一帯は数百万年前は海底でした。この地域は、比較的新しい時代に海底に堆積した砂や泥からできているため地盤が軟弱で、地すべりが起こりやすい原因になっています。将来、長野盆地や近隣で大規模な地震があった場合、善光寺地震のときと同様に多数の地すべりが発生することでしょう。山田中の埋もれ木は、過去の災害の実例から将来起こりうる災害の傾向を教えてくれる貴重な物証なのです。

山田中の埋もれ木は、現在、乾燥や消毒等の保存処理を進めているところです。カラマツは乾燥にまだしばらくかかりますが、スギの埋もれ木は9月19日(土)から博物館常設展示室で公開します。

最後に、埋もれ木の採取にあたって、ご許可いただいた地権者の岩崎永佳様、便宜を図っていただいた区長北沢栄樹様ほか山田中区の皆様、山田中の埋もれ木を郷土史「長野」に発表され、今回の埋もれ木採取に関してもご教示くださった小出章様に厚くお礼申し上げます。(畠山幸司)

新出史料紹介 真田昌幸書状



上の写真は、真田昌幸の書状であり宛名がありません。年記もなく、正月二十二日付です。内容は武田信玄の子・武田勝頼が築城した新府城（山梨県韮崎市）の築城に関するものであり、これまでの研究成果から、発給されたのは天正9年（1581）と推定されます。長野市稲里町在住の小林清吾さん所有の古文書で、元・長野市誌編委員の丸田修治さんが当館に持ち込まれたことでその所在が明らかになりました。

真田昌幸の花押の編年をおった柴辻俊六氏の業績をもとにすると、この時期の花押の形式にこの花押は当てはまります。文書の大きさは、タテ28.0×ヨコ34.0cmであり、9つの折り目がついています。

新府城は、武田家が織田信長によって滅ぼされる前年に工事が始められました。広大な城郭域をもつことが特徴ですが、武田家がそれまで構えていた躑躅ヶ崎から新府に居館を移したことについての評価は現在でも意見が分かれます。

そもそも、この文書の所在はこれまで分かっていませんでした。江戸時代の終わりごろ、松代藩によって編纂された『長国寺殿御事蹟稿』に採録されている写しが唯一であり、これによって研究が進められ

てきました。こうした中で、この発見は極めて重要な意味を持ちます。

さて、この文書は、新府城造営に関して「家10間に対して人足1人の割合で30日間徴用する」など具体的な内容が記されていたり、新府城の建設事業の開始時期を天正9年と想定することができる点で、新府城の歴史を紐解く上で重要な文書とされてきました。また、真田昌幸が発給していることから、真田昌幸を新府城建設の担当奉行であるとする見解もあります。

今回発見された文書は宛名を欠くため、誰に命じたものかが分かりません。前出の『長国寺殿御事蹟稿』の文書の写しも宛名がなく、所蔵に「出浦右近助昌相伝」と注が付けられているため出浦氏に命じたものと理解されてきました。しかし、両文書ともに宛名がないため、果たして本当に出浦氏に対する命令か判断に迷います。もしくは、この文書自体は複数に出され、その中の1点が今回見つかったと想定することもできます。

この古文書は、真田信之朱印状とともに和紙の封筒に収納され伝わっていて、おそらくは近代以降に小林氏の所有になったと考えられます。

（原田和彦）

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/index.html>

長野市立博物館	〒381-2212	長野市小島田町1414	026 (284) 9011
戸隠地質化石博物館	〒381-4101	長野市戸隠栃原3400	026 (252) 2228
鬼無里ふるさと資料館	〒381-4301	長野市鬼無里和田沖・国道406号線沿い	026 (256) 3270